

「おたく」誕生

—「漫画ブリッコ」の言説力学を中心に—

山中 智省

■はじめに

「おたく」（し）という言葉は二〇〇〇年以降、『電車男』の大ヒット（二〇〇四年～二〇〇五年）やいわゆる「萌え」ブームなどを通じて急速に一般化し、現在では日本のサブカルチャーを代表するキーワードの一つとして認知されるまでになっている。こうした状況のなか、アカデミックな研究の場で「おたく」が扱われることも増え、社会学をはじめとする様々な学問領域で研究が行われている。文学研究においても例外ではなく、近年ではライトノベルと呼ばれる小説の読者層として「おたく」が論じられたり、「国文学 解釈と教材の研究」（二

〇〇八年一月、學燈社）で「萌え」の正体」という特集が組まれるなど、注目される機会が増えている。

このように盛んに取り上げられている「おたく」であるが、その歴史を紐解くと、一応の起源は一九八三年まで遡ることができる。この年、「漫画ブリッコ」というマインナーロリコン漫画誌に中森明夫『おたく』の研究」と題されたコラムが掲載された¹⁾。このコラムによって「おたく」という言葉は、現在にも通じる意味で初めて活字化されたとして、「おたく」研究では重要視されている。また、詳しくは後述するが、当時の「漫画ブリッコ」内で差別的な内容であると問題視され、読者や編集者を巻き込んだ論議を引き起こし、「おたく」という言葉

が広まるきっかけにもなったとされている⁽³⁾。

さて、「おたく」の歴史を考える上で見逃せないこの出来事の具体的な様相については、実際に「漫画ブリッコ」に関わった当事者たちの証言、あるいは社会学の研究などで言及されてきた⁽⁴⁾。これらは示唆に富む重要な先行研究群である一方、いくつかの大きな課題を抱えている。例えば、当時の状況について証言者の記憶や自己回想に頼らざるを得ない点や、資料収集の困難さから網羅的な分析が行われず、「『おたく』の研究」を含む「漫画ブリッコ」内の一部の言説ばかりが分析対象としてピックアップされている点が挙げられる。したがって、「『おたく』の研究」をめぐる「漫画ブリッコ」で何が起きていたのか、その全容については未だ詳細に把握されていないのが現状である。

そこで、本研究ではこの点を明らかにするために、前述した課題を踏まえた上で、「漫画ブリッコ」及び関係資料を網羅的に扱った調査と実証的な分析を行っていく。さらに本研究は、収集した言説資料の読み込みを重視した分析を行うことで、そこに内包されている価値判断や権力関係といった、「漫画ブリッコ」内の言説力学をよりはつきりと浮上させることを目指すものである。

■ 一 中森明夫『おたく』の研究

まず、『おたく』の研究の具体的な内容について紹介したい。このコラムは「漫画ブリッコ」一九八三年六月号〜八月号、一二月号の「東京おとなクラブJr.」というコーナーで全四回にわたり連載された。このコーナーは、中森が編集人を務めていたミニコミ誌「東京おとなクラブ」⁽⁵⁾の出張版として作られていた。全四回の連載の内、中森が執筆したものは六月号から八月号の計三回である。

第一回となる六月号の「『おたく』の研究①・街には『おたく』がいつばい」では、まず、コミケット⁽⁶⁾に集まる「十代の中高生を中心とする少年少女」の特徴を挙げている。

それで何に驚いたつていうと、とにかく東京中から一万人以上もの少年少女が集まってくるんだけど、それらの異様さね。なんて言うんだろうねえ、ほら、どこのクラスにもいるでしょ、運動が全くだめで、休み時間なんか教室の中に閉じ込もって、日陰でウジウジと将棋なんか打ち興じてたりする奴らが。モロあれなんだよね。髪型は七三の長髪でボサボサか、キョーフの刈り上げ坊っちゃん刈り。イトーヨーカドーや

西友でママに買ってきて貰った980円1980円均一のシャツやストラックスを小粋に着こなし、数年前はやったRのマークのリーガルのニセ物スニーカーはいて、シヨルダーバッグをパンパンにふくらませてヨタヨタやつてくるんだよ、これが。それで栄養のいき届いてないようなガリガリか、銀ブチメガネのつるを額に喰い込ませて笑う白ブタかてな感じで、女なんかはオカッパでたいがいは太つて、丸太ん棒みたいな太い足を白いハイソックスで包んでたりするんだよね。普段はクラスの片隅でさあ、目立たなく暗い目をして、友達の人もない、そんな奴らが、どこからわいてきたんだろうって首をひねるぐらいにゾロゾロゾロゾロ一人！それも普段メチャ暗いぶんだけ、ここぞとばかりに太ハシヤギ。アニメキャラの衣装をマネてみる奴、ご存知吾妻まんがのブキミスタイルの奴、ただニタニタと少女にロリコンファンジンを売りつけようとシツコク喰い下がる奴、わけもなく走り廻る奴、もー頭が破裂しそうだったよ。(？)

中森は次いで、コミケットやマンガファン以外の例として「アニメ映画の公開前日に並んで待つ奴」「ブルートレインを御自慢のカメラに収めようと線路で轢き殺されそうになる奴」「本棚にビシッとSFマガジンのバック

ナンバーと早川の金背銀背のSFシリーズが並んでる奴」などを挙げている。そして、このような「マニア」「熱狂的ファン」「ネクラ族」と呼ばれていた「人々を、あるいはこういった現象総体を統合する的確な呼び名」として「おたく」を提唱するのである。命名の経緯や「おたく」とは何であるのかは次回から「本格的に答えていく」として、最後は読者に「君の廻りを見廻してごらん、ホラいたいた、『お・た・く』がーとところでおたく、『おたく』？」と疑問を投げかけて終わる。

続く七月号の『『おたく』の研究②・『おたく』も人並みに恋をする？』では「おたく」の由来を確認しつつ、その性癖や行動を分析している。

さて前回は、この頃やたら目につく世紀末的ウジャウジャネクラマニア少年達を『おたく』と名づけるつてとこまで話したんだよね。『おたく』の由来については、まあみんなもさっしがつくと思うけど、たとえば中学生ぐらいのガキがコミケとかアニメ大会とかで友達に「おたくらさあ」なんて呼びかけてるのってキモイと思わない。それでまあきやつらも男なんだから、思春期ともなればスケベ心のひとつも出てくるだろう。けどあのスタイルでしょ、あの喋りでしょ、あのセーカクでしょ、女なんか出来るわきやないんだよね。それ

に『おたく』ってさあ、もう決定的に男性的能力が欠除してんのよね。でたいがいミンキーモモとかナナコとかアニメキャラの切り抜きなんか定期入れに入れてニタニタしてるんだけど、まあ二次元コンプレックスといおうか、実物の女とは話しも出来ないわけ。これがもうちよいマシになると、女性的存在をあんましアピールしないアイドル歌手のほうへ行ったり、屈折してロリコンしたりするってわけ。それで成熟した女のヌード写真なんか絶対受けつけないんだよな。(8)

この後、「おたく」が「男性的能力が欠如しているせいか妙におカマっぱい」例として、二〇歳を越えた男性の奇妙な行動(「両ひざそろえし字曲げぴよんハネ」など)を挙げ、「だいたいこんな奴らに女なんか出来るわけないよな」としている。しかし、「世の中誰でも最後は結婚する」ことから『おたく』は『おたくおんな』と結婚して『おたくこども』を生む」と結論付けている。

第三回となる八月号の「おたく地帯にまよいこんだ」では、初めに「おたく」という言葉が随分定着したとして、かぎ括弧を外そうと提案している。その後、「おたくって言葉発明した当時は、誰もその意味知らないじゃん、で、それをいいことに随分遊んだもんだよ」と述べている。その具体例として、「おたく」の溜まり場であ

る新宿三丁目のフリースペース(本屋)へガールフレンド(高二のユミ)を連れて行った時の体験を語っている。

「ホラ、そこにもおたく、あそこにもおたく、あつアイツなんか超おたくね」なんて、おたくを散々おたく呼ばわりしてたのね。奴らおたくの意味なんかわかんないもんだから、キョトンって感じで「おしん」の目をしちゃってんのよ。ユミの奴ったら、もう笑いこらえるのに必死でさ「キャハハ、やめてよアキオ」なんてまっ赤な顔してやんの。」フリースペの一面が敷居みたいで区切られてて、喫茶店まがいのことやってるんだけど、敷居の中から異様な笑い声が聞こえてくるんだよな。あれは聞いた奴しかわかんないと思うけどさ、くらあかるーいっていうか、ナメクジとかヒルに鳴き声があるとしたら、たぶんあんなじゃないかなあって感じの、たまんなく不快な笑い声なんだよ。なんだろうって敷居のむこう側覗きこんだユミの奴、「ひっ」とか声あげて、ビクンッて条件反射的にのけぞっちゃってさ、ぶるぶる震えてんの。どうしたんだろうってオレも覗いてみてわかったね、そこにはさ、おたくの中のおたくって感じの奴らが7〜8人ウジやってたんだよ。アニメ雑誌だとかポスターだとかテーブルに広げちゃってさ、それをネタに自分達だけしか通じ

ない冗談言いあってドヒヤドヒヤうちわで大受けしてんの。そのおぞましい光景たるや地獄の祝祭というか、全日本おたく選手権関東地区大会決勝っていうか、オレ自身おぞけ震っちゃったね。ユミの奴も、鳥肌立ちちゃったとか、ジンマシンが出たーとか身震いしちゃってね、どっからわいてくんのよあのヒトたち、なんて怒っちゃってんの。(9)

その後中森は、「おたく」がどこから来るのかについてフリースペースの関係者に事情を聞く。関係者は「奴らもここしか来る場所がないんだよ」と語り、フリースペースができる前の「おたく」が「棲息」していた場所に疑問を持った中森に対しては、「一人一人分断されていた」と答えている。

以上が、中森『おたく』の研究の内容となる。コラム全体を通して際立っているのは、「おたく」に対する中森の明らかな蔑視である。中森は第一回の文章において、「おたく」命名の宣言を行うと同時に、「おたく」の外見的特徴、趣味志向からその定義づけを行っている。また、それらの定義に当てはまる「おたく」は「どこのクラスにもいるでしょ」と読者に同意を求めらることで、彼らが確かに存在していることに共感を得ようとしている。そして、それらの定義に当てはまる人間は「異様」とされ、

「白ブタ」「キモイ」「ナメクジとかヒル」といった蔑視を含んだ価値付けが行われている。しかし中森自身は、あくまで「おたく」を外部から眺める側に立ち、自分は決して「おたく」ではないという姿勢を保っている。

中森のこのような姿勢には、あるイメージ・概念によって何かを囲い込むロジックが働いている。ここで想起されるのは、エドワード・W・サイードが提起したオリエンタリズムである(10)。サイードのオリエンタリズムとは、西洋(オクシデント)の東洋(オリエンツ)に対する支配の様式を意味する。具体的には、西洋/東洋という二項対立において、優/劣、先進/後進、能動/受動といった概念による意味づけが、差別や偏見を内包しながら行われることで両者の差異が拡張される。そして、対照的存在である東洋から西洋を疎外することで、西洋の姿を逆に規定しようとするものである。

このロジックをあらためて「おたく」の場合に適用すれば、西洋にあたるのは中森、東洋にあたるのは「おたく」ということになるであろう。では、中森『おたく』の研究において、両者の差異を拡張している概念とはなんなのか。

この点を明らかにするために、三回の連載の位置づけを確認してみよう。第一回は「おたく」命名に至る経緯と、「おたく」の外見的特徴や趣味志向を説明した導入部

である。第二回以降は、第一回の最後に「次回からゆくりと本格的に答えていく」とあることから、ここで語られる内容が中森の主張の中心（「おたく」の本質的な部分）であると考えられる。第二回と第三回の内容に注目すると、第二回は女性にもてない「おたく」を揶揄し、第三回はガールフレンドを連れただ森がフリースペースを訪れ、「おたく」を嘲笑している。つまり、中森にとつては「女が出来る／出来ない」ということが、「おたく」とそれ以外の人間を分ける価値基準であり、両者の差異を拡張している概念であると考えられる。

このような中森の認識について、高原英理は「中森的認識による「八〇年代若者文化」には表と裏がはっきりして」おり、「表が「トレンド」「ブランド」等に代表される「オシヤレ」（正しくは「オツシヤレ」）文化であるとするならば、裏にはアニメと「コミケ」（コミックマーケット）の略。マンガ同人誌販売が主）に代表されるような「オタク」文化があり、徹底的に前者が望まれ理想的と考えられるとともに後者が軽蔑されていた」と述べている⁽¹⁾。

中森は『「おたく」の研究』から数年後、高原が指摘する「表」の文化となった新人類文化の旗手として注目を集めることになる⁽²⁾。ならば中森にとつて『「おたく」の研究』とは、「女が出来ない」「おたく」を笑うことで、

自分自身は「表」の文化に所属していることを示そうとした試みであつたと言えるのではないだろうか⁽³⁾。すなわち、中森は自らの反面教師として、なおかつ自己を規定する試みとして「おたく」を提唱したと考えられるのである。

■二 差別用語として認識された「おたく」

『「おたく」の研究』連載当時の「漫画ブリッコ」の読者は、読者投稿欄によると、十七歳を中心としたロリコン漫画に興味のある高校生、大学生であり、八割は男性である⁽⁴⁾。一方、中森が「おたく」に見出した特徴の一つに、「男性的能力が欠如」しており、「二次元コンプレックス」か「ロリコン」になるというものがある。この指摘からも分かるように、中森が「おたく」と規定した存在は「漫画ブリッコ」の読者とイメージが一致する。それを見越してか、第一回では読者に向かつて「ところでおたく、『おたく』？」と挑発的な疑問を投げかけている。中森の「おたく」蔑視は、彼の文章の中で仮定された「おたく」だけでなく、「漫画ブリッコ」の読者にも及んでいるのである。

その結果、「はじめに」でも触れたように、「漫画ブリッコ」の読者と編集部を巻き込んだ「おたく」論議を引

き起こすことになった。その兆候は連載開始直後から見られたようで、中森は雑誌「Stage」（三共社）の一九八三年七月号のコラムで、「自ら我こそは『おたく』なりと名乗る読者から中森明夫大批判が寄せられ連載続行が危ぶまれてる状態」であると述べている。

「漫画ブリッコ」誌上で最初に動きが見られたのは、一九八三年九月号である。『おたく』の研究^①は「作者急病のため一回休みます」として中断され、同時に読者投稿欄「新宿マイナークラブ」に男性読者の反論が掲載された。「あえて言わせていただくなら、あなたの文章は身体障害者のことを指して、いかにそれが不快な存在であるか述べ、自分は健常者だと胸をはっているようなものです」とするこの反論は、投稿欄の担当者が「友論の文章は、実はケツコー沢山来てたのですが、感情に流されて自己破綻をきたしているものばかりで、載せるには至らなかつたのですが、多少論旨は不明快だけど、ようやく読むにたるものがきた」とコメントしていることから、蔑視の対象となつた読者を擁護するために意識的に掲載したものであることが分かる。

中森に対しては、「中森君自身もある意味で『おたく』の一員であるという自らの立場が分かっている（中略）非生産的な中森君の文章は困つたものだと思ひ、改善を彼等に求めておりました」と批判的な立場をとっており、

ここにも読者に配慮した姿勢が窺える^②。コメントの後には、「今月号の『おたくの研究』が掲載したのは編集部とは無関係な、彼等の判断」とあるが、中森が「Stage」一九八三年一〇月号において、連載打ち切りと読者投稿、及び編集部の見解に対して反論の文章を掲載していることから、実際は編集部の判断によるものであつたと考えられる。

この九月号以降、「漫画ブリッコ」では『おたく』の研究^③と「東京おとなクラブJr.」をめぐる状況に混乱が見られるようになる。一〇月号の「東京おとなクラブJr.」の「欄外お知らせ」には、「一部熱狂的支持者も出ている『おたくの研究』中森明夫氏旅行中のため今度も休み。次号での展開を待とう」というように、九月号とは異なる休載理由が示される。続く十一月号では、「東京おとなクラブJr.」というコーナー自体が休載するという事態が起こり、巻末には「東京おとなクラブは都合により今回は休載します。次号では復活しますのでヨロシク!」という告知がなされている。

そして一二月号では、中森の連載が打ち切られた代わりに、「東京おとなクラブ」の同人の一人が、江治ソン太名義で「おたくの研究・総論」を掲載する。しかし、中森の文章に見られた蔑視は薄れ、「人間誰しもモラトリアム期間のまま一生をすごす、ということとはできない。い

つかは大人にならなくてはならない」といった主張が中心になっていく。この変化は、これまでの経緯を意識した上で『「おたく」の研究』の差別的な内容を緩和し、読者に対して釈明するとともに、『「おたく」の研究』が単なる読者の罵倒にならない形での幕切れ、すなわち批判解消を編集部が望んだために行われた措置であったと思われる。

翌年の「漫画ブリッコ」一月号を見ると、この号を最後に「東京おとなクラブJr.」の連載は終了することになるのだが、ここで再び中森が登場している。中森は「岡崎京子・桜沢エリカはなぜ『ブリッコ』でウケないのか」の中で、前述した読者や編集部からの批判を自虐的に用いながら、「おたく」について次のように語っている。

非生産的な中森明夫です（笑）。イエーイ！元気でやってくれるかい。5か月ぶりの登場だぜえ。『ブリッコ』じゃ3回ほど「おた○の研究」ってのを連載して反響いぢぢるしかかったんだけど、どうやらおた○ってのは差別用語に指定されちゃったらしく使えなくなっちゃったのだ。でまあこーゆー場合、言い換えとゆう手段があったのです。ホラ、口が不自由な人とか、目が不自由な人ってあるでしょ、そういう言い換えでいくと、

お○くってのは、現実感覚の不自由な人、ファッションセンスに不自由な人、友達の不自由な人、明るさに不自由な人……ダメだ、なんかますます差別っぽくなっちゃった。身障者を笑う健全者の中森です（笑）。宝島少女、ポンプ少年とともに女子大生もバカにする中森です（『東京おとなクラブ』3号買ってね）。（16）

中森によって「おたく」が提唱されてから半年。「おたく」を差別用語として語る文脈が出来上がっていったことが、これまでの流れから見取れるだろう。この流れの形成にもつとも影響を与えたのは、何よりも「漫画ブリッコ」の編集部である。中森の連載の打ち切りや読者投稿の選別などを見るに、単なる読者擁護にとどまらず、「おたく」を差別用語として摘発しようとする編集部の力が見え隠れしている。この「力」をよりはっきりと意識させられるのが、当時「漫画ブリッコ」の編集者であった大塚英志の存在である。

■三 「おたく」をめぐる大塚英志の編集戦略

大塚は『「おたく」の精神史・一九八〇年代論』（二〇〇四年二月、講談社現代新書のなかで、編集者を務めていた当時の編集体制について次のように述べている。

八三年五月号から八五年の九月号までぼくは実質的に同誌の唯一の編集者であり、その後半の時期は「編集人」として多くの名が奥付にある。編集後記には常に四人前後が名を連ねているが、それは発行人や制作進行担当の社員、及び最初の数カ月、記事とまんが原稿の一部を彼を介して買っていた別のエロ本出版の編集者であり、編集部が一人しかいないのも何だから、といった程度の理由で「後記」は複数の人間が書いている。(17)

しかしながら、『おたく』の研究」が連載された時期については、多少事情が異なるようである。

最初の一年はセルフ出版とぼくを仲介した、編集後記にも名のある他社のエロ本出版の編集者が編集実務を半分行なうという約束で受けとっていた。編集者だがペンネームを使っていた彼は、いくつかの記事やまんがと読者欄をしばらくの間担当したが、やがて編集には関与しなくなる。(18)

つまり、少なくとも「漫画ブリッコ」一九八四年五月号までは、大塚ともう一人の編集者による二人体制で編

集が行われていたことになる。一九八三年から八四年の「漫画ブリッコ」を確認すると、大塚が「他社のエロ本出版の編集者」としているのは、同誌で「オガタ」「おぐわた」のペンネームで登場する緒方源次郎である(19)。

「漫画ブリッコ」で緒方が編集を担当していたことは、読者投稿欄である「新宿マイナークラブ」と、『おたく』の研究」が掲載された「東京おとなクラブJr.」のコーナーから分かる(20)。したがって、『おたく』の研究」の連載に関わり、一九八三年九月号の読者投稿欄「新宿マイナークラブ」で読者にコメントしていたのは緒方であると言える。

しかし、ここで一つの疑問が生じる。なぜ緒方は中森の『おたく』の研究」を掲載しておきながら三回で打ち切り、読者投稿欄で批判を述べなければならなかったのか。この疑問を解消する上で注目すべきは、もう一人の編集者であった大塚である。大塚は、後に中森の連載を「打ち切った」と明言している。また、この打ち切りに関して中森は次のように述べている。

連載当初から内容に関して修正してほしいと担当の緒方氏より申し入れがあった。後に同誌の編集長となる大塚英志氏よりのクレームによるとのことだった。その種のやりとりが数度繰り返された結果、連載は打ち

切られる格好となった。(中略)間接的ではあれ、連載を打ち切られたことの要因に大塚氏の強い圧力があつたことは明白だった。(21)

以上のことから、二人体制の編集の中で大きな権限を持つていたのは大塚であったことが分かる。その権限の大きさは、中森からすれば「強い圧力」と映るほど、明確なものであつたと思われる。ゆえに、「新宿マイナークラブ」における緒方のコメントは、連載打ち切りを決めたであろう大塚の意向に添うよう書かれたものであると考えられる。

「漫画ブリッコ」内で中森の連載が打ち切られた経緯が初めて読者に知らされるには、一九八四年六月号を待たなければならぬ。しかも、その事実を語つたのは他ならぬ大塚であつた。なぜこれほど後になつてから連載打ち切りの説明がなされたのか。「漫画ブリッコ」の記事から見えてくるのは、大塚が自らの主張を積極的に述べることができると環境を、雑誌内に整える必要性である。

一九八三年の「漫画ブリッコ」において、大塚は緒方のように読者投稿欄を持つておらず、自らの主張を述べることがほとんどなかった。だからこそ、緒方が九月号の読者投稿欄において、大塚の意向を汲んだようなコメントをしたとも考えられる。しかし、一九八四年二月号の

「新宿マイナークラブ」で、突如読者投稿欄の分離が宣言される。緒方の担当であつた「新宿マイナークラブ」とは別に、大塚が担当する「妥協通信」という読者投稿欄が創設されたのである。

これを契機として、「漫画ブリッコ」における大塚の自己主張は活発になってくる。例えば、一九八四年四月号の「まんがの真相」というコーナーでは、「漫画ブリッコ」を没収する教師を批判し、没収されてしまった読者に同じ本を郵送する「没収保険」という制度を作ると宣言している。「まんがの真相」は、これまで漫画や雑誌の紹介を中心にしてきたコーナーであつたが、これ以降大塚の主張を発表する場としての色合いが濃くなる。そして、ここで大塚が述べたことに対する読者の反応が「妥協通信」に集まってくるのである。前述した「没収保険」に関しても、翌月号にはすでに読者の投稿が大塚のコメントとともに掲載されている。つまり、「妥協通信」は大塚の主張に対する読者の反応を集めると同時に、大塚と読者の議論の場として機能しはじめていたことが分かる。

こうした環境を整えることで、大塚は自己主張を積極的に言う正当性を得ることが出来る。また、読者投稿欄に寄せられた意見の掲載に決定権を持つことで、自分が求める議論の流れを意図的に作り上げることが可能にな

る。そして、まさにこの環境が整った一九八四年六月号の「妥協通信」において、中森の連載打ち切りについての説明は行われたのである。

大塚はここで、「最近、マンガ家・編集者のおたく攻撃が泥沼化してきました。最初は健全な批判だったのが、今ではマンガのネタや罵詈雑言のさかなとなっていて非常に不快です。(中略)この問題に取り組んでください」とする読者の投稿に対し、一ページ全てを費やした長いコメントを掲載している。

◎この問題については一度キチンとしておこなうてはいけない……と思っていました。まず、新しい読者には「おたく」という単語の意味が不明だと思うので説明しますがこれは以前『ブリッコ』誌上で、東京おとなクラブの中森明夫氏がいわゆるロリコンファンやアニメファンを指す蔑称として作りだした造語です。これほどあからさまに差別することを目的として作られた「差別用語」も珍らしいと思います。さて、中森氏の「おたくの研究」についてぼくは担当の緒方に対し毎回、「不快感」を表明してきました。中森氏の文章は〈健全な批判〉ではなく〈差別〉を目的としたものにと目についたので、最終的には登場を御遠慮願うことになったのですが、意外だったのは中森氏の文章に

読者を含めて、相当の支持者がいたことです。たしかに感情的な文章と〈おたく〉という語の差別用語としての秀逸さ(?)は無責任におもしろがるには充分のものだったといえます。結局のところ、〈おたく〉なる語はすっかり定着してしまいました。(22)

書き出しからも分かるように、大塚は「おたく」に対する差別・批判に対して、何らかの主張を述べる機会を窺っていたようである。これまでの経緯を考慮すると、その機会こそ、「漫画ブリッコ」における自己主張のための環境作りであったと考えられる。

これほどまでして大塚が主張しなかったのは、「おたく」は差別用語であるということである。「これほどあからさまに差別することを目的として作られた〈差別用語〉も珍らしい」とまで言うほど、大塚はその点を強調している。それゆえ、読者を含む中森の支持者に対して、「無責任におもしろが」っていると言呈しているのである。読者批判とも受け取られかねない発言だが、それほど大塚は「おたく」差別を助長するような動きを無視できなかったのだろう。そして大塚は、この問題に対して取るべき態度を次のようにまとめている。

人は多分、自分の依る所の価値でしか物事を見れない

のだと思います。それは仕方のないことで、ただ、他にも様々な価値のあることを認め、時に、別の〈価値〉から自分の〈価値〉を計り直すことは可能です。〈おたく〉 批難もその様な上に成り立つものであってほしいし、一方、まんがファンの人たちも自分たちのふるまいを第3者の目から見つめることは決して無駄でないと思う。(23)

中森の提唱した「おたく」に、オリエンタリズムと同様のロジックが働いていたことは先に述べた。このコメントからは、一方の価値観によって他方の価値観を差別するそのロジックを、大塚が「おたく」から見出ししていたことを窺わせる。だからこそ大塚は、お互いの価値を認め合った上での「健全な批判」を求めたのではないか。

続く七月号と八月号の「妥協通信」(八月号では改名され「妥協ポスト」)には、やはり大塚の主張に対する読者の反応が掲載された。七月号では四つの投稿が掲載され、大塚の主張に肯定的な意見と、「うまいこと読者をまるめこもーとしてるよーに感じるけどね。(中略)「おたくを馬鹿にするやつは人でなしだ!」と言ってるみたい」といった否定的な意見がそれぞれ出された。大塚は「たくさんの意見が集まりました。(中略)それぞれの意見につ

いては敢えてコメントはしません。また、考えがあったら聞かせてください」として自己主張はせず、読者の反応を前面に出す形で終わっている。

なお、七月号の「妥協通信」では、「漫画ブリッコ」内で自己主張を繰り返す大塚に対して、「やっぱ編集者は陰の存在の方がええでー。自分の考えはなるべく押し殺した方がええんとちやうか」とする読者の批判も見られた。これに対して大塚は、「確かにそういう編集者のあり方もあると思います。しかし、自分の考えを示した上で批評にも耳をかたむけていくーそういういき方も、また、あると思うのです。無論、その主張は誌面全体に実を結ぶべきものであることは言うまでもありません」と、編集者としてのポリシーを表明しており、かなり意識的に自己主張が行われていたことを確認できる。

そして八月号では、「おたく」を一概に批判すべきではないが「おたく」にも見直すべき点はある、「良いものは良い、わけて、いやなものはいやという、そーいう元気が大切」といった二つの投稿が掲載された。これに対して大塚は、「おたくモンドイについては今回もたたくさん手紙が来ました。一応の結論が出た感じだね。アニメファンやまんがファン云々という以前に「おたく」と呼ばれた人たちに改めなくてはならないことは確か」とコメントしている(24)。大塚はこの回をもって「結論は出た」

として、読者投稿欄における「おたく」議論に終止符を打った。

読者投稿の選別やコメントから見て取れるのは、最終的には六月号の大塚のコメントに議論の結論を誘導しようとする意図である。すなわち、「おたく」は差別用語であり価値観を認め合わなければ健全な批判はできない、とする主張を読者に認識させるべく、大塚は自らの「力」を行使しているのである。

大塚がこれほど「おたく」にこだわった理由としては、まず読者の擁護が考えられる。中森によって「おたく」とされた人々は、「漫画ブリッコ」の読者とイメージが一致する。もしも編集部が擁護に動かなければ、読者を失い雑誌の存続も危うくなる恐れがある。大塚は「漫画ブリッコ」の編集者になって以降、同誌を大塚の言う「美少女まんが誌」へとリニューアルし、ロリコン漫画誌の体裁を守りつつ、岡崎京子、桜沢エリカ、白倉由美、藤原カムイといったマンガ家を起用した。後の大塚による説明では、これは雑誌の市場を「おたく」と呼ばれた人々だけでなく、中森をはじめ後に「新人類」と呼ばれる人々まで含めようとしたためであったとされる²⁵。しかし、市場として大塚が重視したのは「おたく」と呼ばれた人々であった。その市場を守るため、なおかつ「おたく」と「新人類」の両方を市場として抱え込むという

矛盾を隠蔽するため、中森による「おたく」差別を批判し、連載を打ち切ったとしている²⁶。

もう一つの理由として考えられるのは、『「おたく」の研究』の非生産性が、大塚の編集者としてのポリシーに反したことである。先に挙げたように、「主張は誌面全体に実を結ぶべきものである」というポリシーを説いた大塚にとつて、一方的な差別にしかならない中森の文章は、雑誌にとつて実にならない、場合によってはマイナスになると映ったのではないだろうか。ゆえに中森の連載を打ち切り、その後処理として「おたく」への根拠のない罵倒や差別を駆逐していったのではなかったか。

ことの発端となった中森は、大塚のこのような姿勢について「これほどあからさまに読者欄を編集者の意見発表（しかも若い読者に対して一方的に、「差別反対」といった、絶対に反論できないような正論をもってする、広瀬隆講演会的なやり方）の場として「私物化」してしまつたケースも珍しいんじゃないだろうか」と、後に批判を述べている²⁷。また、中森は大塚が「おたく」を差別用語と主張したことについて、「差別用語だ！」と声高に言い立てて、一方的にレッテル貼りをするだけでは、それもまたたんなる用語差別だと思ふ」と述べている²⁸。確かに中森の文章には「おたく」に対する差別意識が見て取れるが、それははっきり差別であると読者に強く認

識させたのは、中森の連載を打ち切った大塚であろう。その姿勢について、中森が読者投稿欄の「私物化」「用語差別」と表現するのも無理はないことは、これまで述べてきたことから領ける。

■四 自虐する「おたく」の登場と編集部啓蒙活動

大塚の巧みな編集戦略によって、「おたく」を差別用語とする文脈は「漫画ブリッコ」において強固に形成された。それを見た「漫画ブリッコ」の読者の中には、この文脈を受け入れ、その主張に同調していた者もいたことは読者投稿欄からも窺える。

しかし、読者全てがこれを受け入れていたかといえば、決してそうとは言い切れない。一九八四年三月号の「岡崎京子の愛の人生相談室」というコーナーに寄せられた読者投稿には、次のような記述が見られる。

京子様、相談したいことがあります。僕は男子校の3年ですが、女の人と全く縁がありません。僕は肥ってます。メガネもかけてます。アニメファンです。おたくです。このまま暗い青春をおくるのではと不安でなりません。僕はどう生きるのが正しいでしょう？(29)

また、一九八四年四月号の「新宿マイナークラブ」では、三月号で緒方が用いた「右手のお友達」(※論者注 自慰行為の対象)という隠語の意味が分からなかった読者が「私は田舎モンです、オダワタさん。右手のお友達の意味が今月までわかりませんんだ、グスン。どくせ私アホでデブのおたくです。(笑って笑って……)」という投稿を寄せている(30)。

彼らは女性に縁がないことや性的な知識に疎いこと、あるいは肥っていることなどを理由に、自らを「おたく」と称している。これは中森が『おたく』の研究において、「女が出来ない」ことを「おたく」の基準として提示したことに由来すると考えられる。中森が「女が出来る」という基準によって自らを「おたく」ではないと規定したのとは逆に、「漫画ブリッコ」の読者の中には「女が出来ない自分はおたくである」と自己規定する者が現れたのである。そしてこのような読者は、自らを「おたく」と規定することで、「女が出来ない」自分を自虐的に笑い、卑下する態度をとっているのである。

このような読者が現れはじめたことに対して「漫画ブリッコ」の編集部は、彼らの意識に歯止めをかけるような動きを見せる。一九八四年三月号から連載が始まった竹熊健太郎の「風雲ライオン新聞」第一回で、竹熊は「僕たちに一番必要なのは『愛』なんだ」として以下の

ように述べている。

自称「ジャーナリスト」の彼（*論者注 竹熊のこと）は、御世辞にも美男子とは言い難く、近眼でチビ、早口で少しドモる癖があり、ウケない冗談を連発し、おたくファッションに身を包み、ハッキリ言つて人間のクズの様な男である。たしかに不快かも知れない、だがK・T君一人愛せなくて、あなたは愛を語る資格はない。全ての女性読者はすみやかに彼に手紙を書くべきである。(31)

竹熊は、自らを「おたくファッションに身を包む」「不快」な存在として説明しており、ここでもやはり「おたく」は自虐的な意味で使われている。しかし、これまで見てきた読者投稿と異なるのは、それがどうしたといわんばかりに女性読者からの「愛」を求めるポジティブな態度である。このことから、編集部が竹熊の文章を掲載した背景には、たとえ「おたく」であっても、女性を求めるポジティブさが持てることを読者に訴えたかったという意図があつたように思われる。

こうした意図を読み取ることができる記述は、これ以降の「漫画ブリッコ」にも見受けられる。まず一九八四年四月号の「新宿マイナークラブ」における、先に挙げ

た読者投稿に対する緒方のコメントには、「必要以上の自己卑下はブザマでもあるんだぞお。しっかりせんかあコラア。おたくとは所詮自意識のレベルの問題なんだからね」となっている。また、一九八四年八月号の「妥協ポスト」では、大塚によって「おたく」問題に「一応の結論が出た」とされた意見の一つに、「僕自身はスポーツ、好きではありませんし、かつとも悪いんですが別にそんなことはどーでもいいのルンルンルンてな気分です。良いものは良い、わけて、いやなものはいやという、そーいう元気が大切なことと思つています」という投稿が見られた。

「漫画ブリッコ」の編集部が危惧していたのは、読者が自らを「おたく」と規定することで必要以上の自己卑下を行い、「どうせおたくだから……」というネガティブな思考にとらわれてしまうことであろう。編集部はそれを解消するために、「おたく」を「自意識のレベルの問題」として処理し、読者の目を竹熊のようなポジティブな態度を取るよう啓蒙しようとしたのではないかと考えられる。特に、「おたく」を差別用語として捉えた大塚にとつては、それを無批判に受け入れる読者の態度は無視できなかったであろう。大塚は読者の取るべき態度について、次のように述べている。

かつて文学から差別されその結果、閉鎖的な社会を作り出してしまったSFファンの二の足をふんでほしくない。できることなら、ここをスタートラインに遠くに行つてほしい。スタートラインが、(ロリコン誌)であることは恥ではない。問題はどこまで駆け抜けていくのかだ、と思う。(32)

大塚が読者に求めたのは、「おたく」という言葉にとらわれず、開放的な思考を持つて成長しようとする態度である。その意味で、こうした編集部啓蒙活動の裏にも、「おたく」議論の時と同じく大塚の思惑が働いている可能性は高いと思われる(33)。

■おわりに

中森によつて初めて活字化された「おたく」は、「女が出来ない」と「おたく」を蔑視することで、メジャーカルチャーに属する自己を規定しようという中森の意図が窺えるものであった。中森によつて「おたく」とされた「漫画ブリッコ」の読者は、差別だと反発する者がいる一方、描写された「おたく」像を自らに当てはめることで自虐的な態度をとる者もいた。この時点で、「おたく」には差別用語と自虐用語という二つの捉え方があったこ

とが分かる。中森の「おたく」蔑視を一方的な差別と受けとつた大塚は、編集者としての「力」を駆使し、「おたく」を差別用語として認識させるための編集戦略をとつた。同時に、自らを「おたく」と自虐する読者に対する戒めも行つていた。このような「漫画ブリッコ」内部における「おたく」をめぐる言説の展開は、後の「おたく」言説に大きな影響を与えていくことになるのである。

【注】

(1) 「おたく」の定義については、現在も多くの議論が行われている。しかし、本研究では「おたく」の定義付けをその目的としているわけではないため、この問題は保留する。なお、本稿での「おたく」の定義は、岡田斗司夫『オタク学入門』(一九九六年五月、太田出版)や東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』(二〇〇一年一月、講談社現代新書)などを参考に、便宜上「アニメ、マンガ、ゲームといった特定の趣味や分野に傾倒している個人、あるいは集団」と設定し、表記は「おたく」とした。

(2) 「漫画ブリッコ」は、一九八二年にセルフ出版(後に白夜書房)から創刊され、当初はエロ劇画誌であった。しかし、一九八三年五月号からそれまでのリアルタッチの劇画からアニメ調のロリコン漫画が雑誌の中心となり、少女漫画的

な絵を表紙に採用するなど「美少女コミック誌」として大幅な路線変更がなされた。これをきっかけに販売部数を伸ばし、ロリコン漫画誌「レモンピール」(あまとりあ社)と並んで二大ロリコン誌とされた。読者層の中心は十代の男性であったが、路線変更以降は女性読者も獲得していた。また、中森明夫は、コラムニスト、作家であり、著作に『東京トンガリキッズ』(一九八八年一月、JICC出版局)、『オシャレ泥棒』(一九八八年八月、マガジンハウス)などがある。『おたく』の研究」をきっかけに、現在まで「おたく」の名付け親として知られている。

- (3) 永山薫『エロマンガ・スタディーズ「快樂装置」としての漫画入門』(二〇〇六年二月、イースト・プレス)は、「中森のコラムで揶揄的に使用された「おたく」という言葉が論議を呼び、大塚英志と論争になるという前代未聞の展開によって「おたく／オタク」という言葉が急速に一般化していくことになる」と、その影響力の大きさを指摘している。

- (4) 社会学の研究では、宮台真司「新人類とオタクの世紀末を解く」(一九九〇年一〇月、「中央公論」)、小川博司「おたく」現象とは何だったのか(林進編『メディア社会の現在』所収、一九九四年四月、学文社)、難波功士「戦後ユース・サブカルチャーをめぐって(四)」:おたく族と渋谷系」(二〇〇五年一〇月、「関西大学社会学部紀要第九十九

号)、松谷創一郎「オタク問題」の四半世紀・「オタク」はどのように(問題視)されてきたのか(羽濑一代編『どこか(問題化)される若者たち』所収、二〇〇八年一〇月、恒星社厚生閣)などが挙げられる。

- (5) 中森明夫、エンドウユイチらが発行人となつて一九八二年に創刊されたミニコミ誌であり、内容は当時のサブカルチャーに対するコラムが中心であった。

- (6) 一九七五年から開催されている日本最大規模の同人誌即売会、コミックマーケット(略称・コミケ、コミケット)を指す。

- (7) 「漫画ブリッコ」一九八三年六月号、二〇〇〇二〇一頁。

- (8) 「漫画ブリッコの世界」伝説の美少女コミック雑誌「ホームページ」,「中森明夫『おたく』の研究」,『おたく』の研究(二)一九八三年七月号掲載)より引用。
(<http://www.burikko.net/people/otaku02.html>)

- (9) 「漫画ブリッコ」一九八三年八月号、一七四〜一七五頁。

- (10) エドワード・W・サイド『オリエンタリズム』(今沢紀子訳、一九八六年一〇月、平凡社)を参照。

- (11) 高原英理、『少女領域』一九九〇年一〇月、国書刊行会、二六二頁。

- (12) 「朝日ジャーナル」(朝日新聞社)一九八五年四月一四日号から筑紫哲也による「新人類の旗手たち」というインタビューシリーズが始まり、同年四月二六日号において中森は

「エディター」として紹介されている。

- (13) 宮台真司は「新人類とオタクの世紀末を解く」で「どんな文化も拡大期には、リーダー／フォロワーが分化する。新人類文化もオタク文化も例外ではなかった。発足当初一すなわちリーダー部分で―新人類文化とオタク文化とは、文化類型として未分化だった」とした上で、八三年以前の「漫画ブリッコ」の読者には新人類とも融合したオタク文化のリーダー部分が存在していたことを指摘し、中森の記事について「オタク文化のリーダー部分によるフォロワー部分への、自己差異化の試みがなされたというわけである。その意味で、これはオタク文化内部の差異化の運動、「オタクの階級闘争」だった」と述べている。

- (14) 「漫画ブリッコ」一九八三年九月号と一二月号の読者投稿欄「新宿マイナークラブ」で行われた読者アンケートをもとにした調査による。

- (15) ここでの「彼等」とは、「東京おとなクラブJ.E.」を連載していた中森を含む、ミニコミ誌「東京おとなクラブ」のメンバーを指すと考えられる。

- (16) 「漫画ブリッコ」一九八四年一月号、一六〇頁。

- (17) 大塚『「おたく」の精神史・一九八〇年代論』、二〇頁。

- (18) (17)と同、二十一頁。

- (19) 緒方源次郎(現・小形克宏)は当時、自販機販売のエロ本「コレクター」(海鳴社)群雄社の別名)の編集者であった。

このことは、「漫画ブリッコ」一九八四年一月号や五月号の「新宿マイナークラブ」に掲載された緒方のコメントから見て取れる。

- (20) 「新宿マイナークラブ」と「東京おとなクラブJ.E.」の担当者が緒方であることについては、「漫画ブリッコ」一九八三年十一月号と一九八四年六月号で大塚が述べている。

- (21) 中森明夫「僕が「おたく」の名付け親になった事情」(「別冊宝島 104 おたくの本」所収、一九八九年一月、宝島社)、九四〜九五頁。

- (22) 「漫画ブリッコ」一九八四年六月号、一九〇頁。

- (23) (22)と同。

- (24) 「漫画ブリッコ」一九八四年八月号 一九一項の原文を掲載。「おたく」と呼ばれた人たちに改めなくてはならないことがあるのは確か」の間違いか。

- (25) (17)と同、二六〜二七頁。

- (26) (17)と同、二七頁。

- (27) (21)と同、九六頁。

- (28) (21)と同、九八頁。

- (29) 「漫画ブリッコ」一九八四年三月号、一八九頁。

- (30) 「漫画ブリッコ」一九八四年四月号、一八八頁。なお、この投稿で興味深いのは、中森によって初めて活字化された際はひらがなで「おたく」と表記していたものが、カタカナで「オタク」とする表記がすでに見受けられることであ

る。

(31) 「漫画ブリッコ」一九八四年三月号、一八五頁。

(32) 「漫画ブリッコ」一九八四年六月号、一九〇〜一九一頁。

(33) 付け加えておけば、これまで取り上げられることがほとんどなかった「漫画ブリッコ」から一九八〇年代末の幼女連続誘拐殺人事件に至るまでの言説は、非常に興味深いものがある。幼女連続誘拐殺人事件とは、一九八八年から八九年までの間に、東京と埼玉で四人の幼女が誘拐の後に殺害された事件である。誘拐の対象が幼女であったこと、遺体をバラバラにして遺棄していたこと、遺骨をダンボールに積めて被害者宅に届けたことなど、犯行の異常性が際立っていたことで社会の注目を集めた。また、犯人である宮崎勤(男性・当時二六歳)の部屋からアニメやホラー映画を含む六〇〇本近いビデオテープが押収されたことで、犯人は典型的な「おたく」であるとする報道がなされ、「おたく」を犯罪者扱いする認識が広まった。一方で、この認識はメディアによる偏見であると反発する動きも活発になり、「おたく」批判派と「おたく」擁護派の議論が当時の言説空間で繰り返された。この事件に至るまでの「おたく」をめぐる言説分析については、紙幅の関係もあり省略せざるをえないが、現在、別稿を準備中である。